書庫のなかから 1

爽日ノート

千　政之

書庫のなかから❶

爽日ノート

千　政之

淡交社刊

著者略歴

昭和31年6月7日、茶道裏千家十五世千宗室家元の長男として生まれる。同志社大学文学部心理学専攻卒業後、同57年、大徳寺にて得度、若宗匠の格式を得る。学生時代よりトーマス・マンに傾倒、執筆活動を開始。京都青年会議所会員・日本ペンクラブ会員・国際青年年事業推進会議委員。

書庫のなかから① 爽日ノート

昭和59年4月21日　初版発行
定価　1,200円
著者　千　政之
発行者　納屋嘉治
発行所　株式会社 淡交社
本社　京都市北区堀川通鞍馬口上ル
振替京都 5-4578
支社　東京都千代田区麹町4-4-3
印刷　京都印刷紙工株式会社
製本　大日本製本紙工株式会社
©1984　千　政之
Printed in Japan

ISBN4-473-00871-1 C0095 ¥1200E

目

次

爽日ノート

海の思い出　6
盛夏の頃　11
朝日のようにさわやかに…　17
親の躾、子の躾　22
雁音の秋　27
雑感往来　32
無愛想な話　37
夜回の声　42
いろいろな人　47
読書残像(1)　53
読書残像(2)　58
あまりに心的な話　64
誇りと情熱　―または〝埃と灼熱〟―　69
泰行記(1)　79
泰行記(2)　84
『魔の山』ダヴォス紀行(1)　91
『魔の山』ダヴォス紀行(2)　96
『魔の山』ダヴォス紀行(3)　101
本の虫からひと言…　107

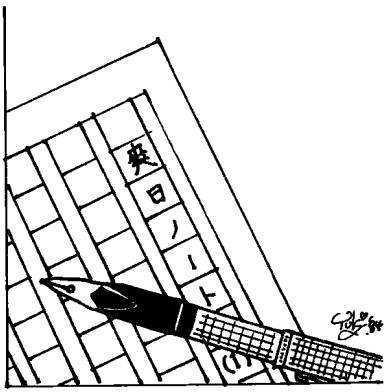
午後の日だまり

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

正月一日　114
節変り　120
春よ来い　126
午後の日だまり　132
ちょっと寂しい、我が師の話　138
雨中閑話　145
性格の話　152
芝生のマナー　158
残暑のなかから　165
秋の戯言　171
僕の友達　178
事始め　185
偲びぐさ
祖父の思い出　192
孫として…　198
〝別れ〟ということ　208
あとがき　213

カバー・表紙装丁／柳原良平
中扉・本文カット／千　政之

爽日ノート



海の思い出

日本海の色は濃いという。群青色の続くその先きで、海はそれと対照的な白雲の噴き上がる空と交わる。

私は海が好きだ。特に、全ての恵みをその表情に押し出している夏の海は、〝母なるもの〟という言葉そのままである。

祇園祭りが終わると、毎年一家で海へ出かける。最近では日本海もかなり観光客慣れしてきたのか、温泉宿的な雰囲気の町が多くなった。しかし、私達の別荘、秀峰荘のある若狭高浜(福井県)は、他の浜に比べて昔に近い姿でむかえてくれる。

秀峰荘は建てられてから五十年程たっている。しかし、少なくとも私の記憶にある

頃から現在まで、すばらしくそのままである。門前に立つ大きな御地蔵様を拝んでからでなくては家に入れてくれなかった祖母は、もういない。しかし、その教えは小さな曾孫達にまでいきとどいている。今年も寸分違わぬ光景が繰り返されるだろう。

小さい頃は御地蔵様を拝み終えると、さあ突撃だ。海にむかうなだらかな丘上に建っている家の玄関までは二十段程の石の階段になっていて、自家農園がその横にある。毎日の食卓にかかせないそれを横目に、私は一気に家に入り真っ先きに庭に出る。とたんに、目が痛くなる程の陽ざしを反射させる青い海が出現するのだ。浜によせる波の音は庭の芝生のむせるような香りと混ざり、見事に夏の休暇の始まりを演出してくれる。潮風をぬって飛びかうバッタや羽虫、弁天島と名づけられた沖の小島や浜から聞こえる歓声に半ば呆然としている私の背に、必ず祖母の「神様におまいりしたのかい」という声が飛び、そして待望の日々が開始されるのだ。

さて、高浜の朝は波の音から始まる。川路柳虹の詩『海と嬰児』の一節に、

朝は遠い海からくる

朝は知らぬ際から明けそめる

というのがある。正にこのとおりに、朝は私を驚かす。そして、朝の光にあふれた海は、それを見るだけでもうその日に何をすべきか教えてくれた。

海へ海へとはやる気持ちをおさえながら食べた朝食の後には、朝のお茶がある。秀峰荘の茶室は三畳であり、それの海側に立礼席が付属している。ここでのお茶が済まないことには海に入れない。しかし、潮風に吹かれながらのお茶は不思議な趣を持っていた。菓子は地元の源六餅やわかめ羊羹、花は早朝その辺りで採ったものを活ける。茶碗はと言えば、家元や叔父が若い頃造ったもので、軍国調のものもありなかなか面白い。葉蓋点前をすることが多いが、その葉の上にうたれた水滴のさわやかさは町中では味わえない風情を持っている。本当にあるものを生かしたお茶だ。まあ、最近になってそういう風情などというものが少しわかってきたが、小さい頃は、点前よりも何よりも海そのものが私を支配していた。垣根ごしに聞こえる歓声や波の音は、その点前の時間を倍にも三倍にも感じさせた。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

お茶が終わり、脱兎の如く浜へ駆け降りるのが毎日のことであった。浜では何故腕のうぶ毛が金色に光るのだろうなどと思いながらの準備体操、そして一気に海に飛びこむ。

昔は遙か沖まで遠浅だった海には、今、テトラポットが設置してある。冬場の波よけのためだそうで、改めて日本海の冬の厳しさを思わせる。しかしながら、美という観点から言えば、あれは甚だよろしくない。浜から沖まで一直線の海が、何か区画整理をされたように感じるからだ。おかげで波までなくなってしまった。夏だけ行くという気楽な立場の人間としては、あのテトラポットには全く困るが、思い出は却ってそのために美化されたような気もし、遠慮会釈なしに顔を出しているそれを見るたびに複雑な気持ちになる。

何故か海では陽は黙って沈む。気づくと、あれほど騒がしかった浜にはもうほとんど人がいない。急に目立ち出した蟹の穴を横目にあわてて家に戻ったものだ。

夕食は洋風のテーブルで食べるが、京都では和風に座して食べるため、足元をすぎ

る夜風に足をブラブラさせられるこのスタイルは魅力たっぷりであった。その頃になると沖の方ではイカ釣り舟の灯りがホタルのように光り、それを見つつスイカなど食べ、時には浜辺で花火をしたりして、一日が終わる。

そうこうしているうちに帰る日は近づいてくる。これだけは石をほろうが金属バットをふりまわそうが臆さない。思えば、旅行というのはそこへ行くまでが楽しいのであって、着いた瞬間からどんどん減っていく時間の価値に対するおしむ心がその場を楽しくするのではないだろうか。

いよいよ京都に帰る時になる。不思議と海にはふり返らなかったが、一歩玄関を出ると何度も何度もふり返った。別荘番のおじさん、おばさんに「また、来年ね」などと送られながら石段を降りていく時の何とも言えないさびしさ、走り行く車の窓から別荘の松林が遠ざかり、高浜の目じるしとして来る時にはあれほど素晴しく思えた青葉山が海を隠すと、そこで実質の夏休みは終わったように感じた。そして、急に夏の暑さにゲンナリする私だった。

（昭和五十六年七月）

盛夏の頃

屋根瓦の照り返しをひときわ強く感じる季節となった。頼もしい援軍を得たせいか、蟬の声もハツラツとしている。暦の上では八月七日を立秋としているが、暑さのボルテージは蟬の声と共に上がり、大文字送り火の頃は、日中など息苦しく思うことさえある。

最近では、大文字送り火のことを〝大文字焼き〟などと称して、各ホテルが観覧用のビアガーデン券を発売したりしている。本来は、盆に帰ってこられた御先祖様を送るためのものが、このように商品化されたのではたまったものではない。そんな風に送り火を見に来る人々の御先祖はどんな顔で送られていくのか、大いに興味がある。

さて、近頃、盆と彼岸をごちゃまぜにしている人が多いと聞く。それも若い人というのなら少しはわかるが、戦前、戦中派にもかなりいるというではないか。数年前のことであるが、盆の最中に友人の家に電話をかけた。昼間から夕方まで何回かけても誰もでない。夜になってようやく通じると、父親の提案で墓まいりに行って来たという。わざわざ空き家を訪ねるなど、初心者のセールスマンでもしない。なさけなくなってきた。

大文字送り火の当日、つまり十六日の夕方、いよいよ御先祖様を送るという時、はすの葉の上に白蒸しをのせたものを弁当にとお供えするが、祖母はよく「まことにおそまつさまでした」と、まるで生きている人に言うが如く深々と頭をたれていた。本書の「孫として…」に記したように、祖母は何事でも、相手の側にたってものを考えた人である。深々と頭を下げるその姿は、私達にものいわぬものに対する心を教えてくれた。

そのように終わる盆の後は、毎年恒例の夏期講習会が始まる。その期間中、毎日ど

こかの席に必ず祖母の歌がかかっている。

行く道は　瀧なす汗を　流せども
　　のぼりて涼し　松風の音

いかにも祖母らしい歌である。毎日の講習会をかげより見、そして教える側、教えられる側の真剣な態度を感じ詠んだのであろう。昨夏の講習会から私は座らせてもらっているが、その時も車椅子の祖母が見に来てくれたのを覚えている。それが最初で最後だったが……。

この講習会に一日座っていると汗に一番悩まされる。足の痛さなど問題外だ。午前と午後とで着物を替えたくなる程の盛暑の中での修業は、まことに修道であろう。他の稽古は疲れて終わるが、この時は疲れてからまた、始まるといってオーバーではない。もちろん一夏ぶっとおしだった昔に比べれば楽なはずであるが、今のところこの十日間が限度ではないか。なにしろ、三時間も座っていれば、足下の畳が湿ってくるのがわかるのだ。教える者が一番風通しの悪いところに座っているのだから仕方ない

が、講習生も同様である。あのじとっという感じは冬が来ても忘れない。早ければ昼すぎにはビールの幻影がちらつく。どうも私の文章にはアルコールがよく登場するが、こういった嗜好を持っている人も多いであろうから気にせず書くことにしている。

普通、種々の興業において、「二八(にっぱち)は鬼門」という言いまわしがある。寒さと暑さの最たる時で人が外出しないためらしいが、家元での講習会は、敢えてこの時に行なう。そういう時に挑戦してくる人こそ、その心構えに意気を感じさせると思うが、実のところ申し込み者の多さにテンテコマイであり、係の方ではうれしい悲鳴をあげている。そして私は暑さに悲鳴をあげている。

さて、この講習会のちょうど折り返し点、五日目は家元の地蔵盆である。家元の中には御地蔵様が二つあり、また、現在門前にある御地蔵様も曾祖父の圓能斎の頃までは家元内にあったという。夕方、中庭にはりめぐらした針金にかけられたちょうちんに灯がともると、それが暮れゆくうちに横のものとつながっているが如く見え、ひとときと私達は俗世間から離れたように感じる。むせるような一日の終わり、ようやく起

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c